

## 30) 流血中癌細胞 (第 2 報)

戸 沢 澄, 稲 葉 博 満  
中 村 民 比 古, 秋 山 瑞 男

今回は動物実験に依り, 基礎的な検討を行つたので報告する。人癌細胞の末梢に於ける出現頻度は, 術中癌病巣周囲静脈血に比較するとかなり少くなつてゐる。そこで我々はマウスの Ehrlich 腹水癌細胞を用いて家兎の毛細血管の通過性について検討を試みた。即ち, 1) 果して末梢血中に出現しうるか。2) 出現しうるならばその量的関係。3) 形態的变化の以上 3 項目である。

実験 1. 耳静脈から入れ大腿静脈から採血する。

実験 2. 大腿静脈から入れ耳静脈から採血する。

実験 3. 試験管内で家兎血液の中に材料を混入。

いずれの場合も逐時的に観察を行つた。

結果: 末梢に出現した癌細胞は形態的に比較的容易に他の細胞と区別できた。しかし多数のものに相当の変形が認められた。家兎血中に注入した細胞は遠隔末梢血管中より回収された。唯その数は非常に少く, 回収血液中正しく同定された出現頻度は注入実数の大よ 300 万分の 1 である。

## 31) 流血中の Trophoblast

戸 沢 澄, 稲 葉 博 満  
岩 瀬 秀 一, 堀 三 男 三  
中 村 敏 紹

臍帯血中の trophoblast について観察した。

胎児娩出直後, 臍帯静脈から 3.8% チトラートに混じて臍帯血 5.0 cc を採り, 25% グルコースと 30% アラビアゴム等量液を加えて 15~20 分静置, 上澄を 1000 r.p.m 5 分遠沈, 沈渣より strich を作り, ギョムサ及び H. E. 染色を施して鏡検する。正常胎盤, 胞状鬼胎, 悪絨腫などの組織によるスタンプ標本も作製して対照した。

満期正常産 9, 9 ヶ月早産 1, 帝切 (10 ヶ月) 1 の 11 例について 4 例の臍帯血中に trophoblast を認めたが, この発見率 (36.4%) は 1960 年 Salivaggio の 53 例中 32 例, 60.4% よりは大分低い。観察された細胞は比較的小型のものであつた。彼の所謂 decidua like cell は 1 例に認めたに過ぎなかつた。肘静脈血中に trophoblast が認められる例もある。発見率が低いのは例数が少く, 標本作成手技にも改善の余地があり, 又同定に慎重を期しすぎた等によると考える。今後は胎児組織についての追求も行つてみたい。

## 32) 絨毛癌脳転位死亡例

霜 一 義

患者は 25 才, N.-P. 既往症に特記すべきことなし, 結婚 23 才。

最終月経 35. 11. 20 日より 3 日間

主訴 性器不正出血 36. 1. 20 日より続く

3 月 7 日初診 子宮底, 臍剣状突起間略中間, 腹囲 80 糎, 診断 胞状奇胎

3 月 9 日入院 子宮内容除去術を行う。

胸部レ線撮影にて, 両側肺野に円形陰影多数が認められた。3 月 18 日退院, その後性器出血続き, 6 月 15 日入院。頭痛を訴う, 肺所見同上。

心電図所見 T 平低, 不完全脚ブロックあり, 血圧 111~70, フリードマン 5, 1 cc (+), 0.1, 0.01 cc (-), 眼底検査 O. B.

テスパミンを投与し, 胸部陰影は消失す。

8 月 10 日午前 11 時 20 分脳肺出血に依り死亡す。

病理組織学的に絨毛癌で, 脳肺腎転位出血に依り不幸な転帰をとつた 1 例を報告する。

## 33) 胞状奇胎卵巣の変化について

高見沢裕吉, 田村良男  
武田 敏, 岡 茂 雄  
倉 田 大, 和賀井 達

当科に於て最近数年間に胞状奇胎で単純性子宮全摘術又は子宮腔上部切断術を行つたものの中卵巣を同時に剔除せる 17 例について検討した。卵巣両側肥大例 4 例, 片側肥大例 6 例, 一側又は両側萎縮例が 2 例, 残り 5 例が正常大であつた。両側肥大例の中 2 例は一方, 1 例は両方が拳大以上の大きさであつた。両側肥大例 4 例中 3 例, 片側肥大例 6 例中 3 例は 3 ケ以上の多房性囊腫をなしていたが正常大及萎縮例には多房性のはなかつた。囊腫の大きさは大小不同でその壁はかなり薄く内容は殆ど透明な液体で充たされて居た。

ヘマトキシリン・エオジン染色及ズダン III 染色による組織学的所見は卵巣肥大例 10 例中 5 例の黄体囊腫を認め, うち 2 例は黄体化不全の像を呈していた。完全に黄体化した細胞について, これが顆粒膜細胞, 卵胞膜細胞何れに由来するものであるか判定がしばしば困難であつたが黄体化不全又は黄体化移行型の細胞が隣接する場合は容易に鑑別し得た。子宮に於ける絨毛細胞の異型性, 侵入形態及各種臨床症状と黄体囊腫形成とは何等有意の関係は認められなかつた。